

「村落生活」

山口大学 木下謙治

(一) はじめに

まず、表題の「村落生活」を考えてゆく場合の枠組というか、アプローチの方向というか、そういうものから話し始めたいと思います。昨年、村研大会の共同討議の際、中野卓会員は、農村社会学の学問的蓄積の中に、生活論があることを指摘した上で、そうした業績の上にたつて考えた方がよいのではないか……という意味の発言をしました。そこでここでも一応、そういう方向をとってみたい……と思います。そうしますと、ただちに思い出されますのは、有賀先生の「村の生活組織」(S23 国立書院、全集V、未来社、一九六八)である。そして、そこで取りあげられているテーマは、労働組織を除けば、田植の予祝行事や、サナブリ、祭り、不幸音信帳の分析等々で、大部分が、直接的に生産活動にかかわるテーマではない。しかし、それらは決して生産活動の場面と切り離されてあるものでもないことも明らかである。この点については、有賀先生の次のような言葉にも読み取れると思います。

「田植は、水稻耕作にとって決定的のものであり、また、その時季に際しては、短期間に終了しなければならない必要から、農村の全能力を一時に発揮するように迫られる点で、古来農村行事の最も重要なものの一つとして見られてきたものであって、単に経済的事象としてでなく、村落の全生活組織がこれと結合していることは、特にこの行事の重大性を示すものとして考えてよい」(全集P20)

つまり、ここでは直接的な生産活動の場面と、祭りやサナブリ等といった消費的な生活場面との結びつきが、はっきり意識され、その上で祭りやサナブリ等の問題がとりあげられていると見てよい。それらの間の結びつきの全体的解明なくしては、はしがきにも記されているように、経済優先の一面的理解にとどまるという認識があったといえる。ここで村落生活とは、私見による大雑把なまとめれば、「農業生産の場面と消費生活的な場面とが、家の連合を介して、相互规定的な関係で多面的に連関している事実」の中に捉えられているとすることができると思います。

こうした有賀先生の仕事の中から、十分な検討をしませんので、少し手前みそになるかも知れませんが、私は、村落生活を考えてゆく場合の方向性をおくものとして、三つのものをさしあたり引き出しおきたいと思えます。

その(1)は、農村社会学的な伝統の中においても、村落生活、あるいはそのユニットとなる農民生活の根本は、生産場面と消費生活場面とが複合した生活パターンの中にあるということです。次に、(2)の点は、生産活動と消費生活とが、なにほどか複合して形成されている村落生活をみてゆく場合に、どちらかといえば、非経済的なファクターを含んだ消費的な生活場面の側から照明をあててゆく……ということですが、これは、より一般化していえば、そこに、生活をみてゆく場合の一つの操作が含まれているということです。この点は、有賀先生が……「社会学的にこの問題を捉えようと思う」(全集P21)と述べているところからも明らかだと思われまます。なにが社会学的吗かということは、いろいろ

あるでしょうが、学問による視点の限定がみられます。私自身も、ほんらい、人間活動のすべてを包括する生活の問題をあますところなく捉える視点というものは不可能だと思う。第③に、ここでの簡略な説明では、その問題が直接的に述べられたわけではないが、有賀先生の場合、ムラの生活組織の単位が、いわゆる「家」であることはいうまでもない。この点も重要だと思えます。

(二) 予備的考察

さて、三つのアプローチの要件を引き出してみたところで、それらについて、本日のお話のまとめへ向けての、中間的、橋渡しの若干の考察をおこなってみたいと思えます。

まず、(1)から少し内容的に考えてみたい。生産場面と消費生活場面との複合という点からいうと、今日の農家生活、村落生活では、全体的には、確かにその複合の程度が落ちてきていることは否めない。東畑四郎氏は、農家の中にモノコトすなわち生涯の仕事という感じとり方にかわって、一時的労働(金に換算)の感じとり方が入ってきたのは、一般には高度経済成長以降の過程だといわれる。いわば、農業がモノコトと観念されていた段階では、生産と消費の複合が高く、有賀先生がとりあげたような意味での生活組織が存在していたといつてよいであろう。Laborとしての捉え方は、原則的にいえば、農村への商品経済の極度の浸透、より直接的には兼業化の著しい浸透によっていると考えられる。兼業化は、もっともドラスティックな生産と消費の分離を生じさせる。

村研の共通課題の共同討議の際に、長谷川会員から「兼業によって、

専業農家よりも裕福な暮らしをしている農家生活をいかにみるか……それを生活破壊といえるか」という要旨の問題提起がなされた。農家生活なり、村落生活を考える場合、職場と家庭というように、生産の場と消費の場がきっちり分かれてしまっている都市生活のようなものまで視野に入れて普遍化した生活一般の捉え方で考えることは適切ではないでしょう。著しく兼業にまぎこまれた農家の場合、それを農家生活という点からみれば、少くともそれは生活の著しい変容であり、周知のように村落生活に、大きい影響を与えざるをえない。

しかし、それにもかかわらず、この種の農家の生活を、生活破壊というのはいかがかと思えます。そして、その問題は(2)の問題にもかかわると思えますので、(2)に進みます。

つまり、(2)生活概念の社会学的構成がいかにあるべきかということにかかわると思うのです。もちろん、ユニットの農家生活、全体としての村落生活という意味においてですが。そして、この問題に言及するためには、やはり、大上段にふりかぶるといわれるかも知れませんが、ムラとは何かの問題に多少ともふれざるを得ないと思えます。この問題については、不十分ですが、比較的最近、社会学評論(九七号、S49年7月)でとりあげましたので、少しくわしい点はそちらに譲ることにいたしますが、村落の規定そのものに関しては、さしあたり、社会学者ではありませんが、小池基之氏の「『小土地所有』を基礎とする『小経営的生産様式』と結びついた『地域的な概念』」を借用しておきたいと思えます。したがって、村落(ムラ)については、その根幹を、小農民的な相互依存関係に基づく共同態(ゲマインシャフト)が、なにほどか

農業集落社会を枠づけている場合ということになるかと思ひます。単に、センサスの集落調査結果のようなものをみて、(都府県で)属地的なまとまりを示すもの八六%を基礎として、林野保有四六・五%、農道道ぶしん共同作業七三%、用水路共同作業六三%などと、いまなお、巾広い共同がおこなわれています。動機や対応はさまざまの形があり、「みせかけの共同体」ともいわれますが、兼業農家といえども、一般には、その大部分が、小土地所有、小農的経営体として、それらを中心とするいろいろの共同に組み込まれることになっている。そして、複合の程度は減少し、さまざまであっても、その限りで生産と生活のコンテキストの複合関係がなほどこかある。例えば、われわれの調査の経験では、岡山県総社市の泰地区の「どじょうなべの仲間」、熊本県矢部町の「いとりぐみ」を中心とした祭祀や共同飲食や旅行やスポーツなどの共同など。さらにもっと一般的にいえば、耕地の基盤整備なども、兼業農家まで含めて、集落全体の協力がなくてはできない。あるいは、みかん農家のようなものが、やはり、地域的な共販体制をとらなければ、販売で非常に不利になる。そういうところに、やはりいろいろな共同が生じる。

次に(3)家の問題について考えてみたいと思ひます。……昭和五〇年度の農家戸数は四八一万余戸、耕地五五七万ha……。つまり、農家一戸当たり平均耕地面積は一haあまりで今日でもあまりかわらない。農家戸数は減ったが、このことは、大局的にみて今日までやはり主流としては、必ずしも長子ではなくても、あととりないし一子単独、あるいは優先相続がおこなわれていることを意味しているとみてよい。最近の山本先生の九州での意識調査によれば、家的志向の意識は、若い層でもある局面で

非常に高い。もちろん、都市近郊や過疎地や、北海道(布施報告にあつたような)のようなものもあるが、もちろん、戦前の家督のようなものは別として、家的な内実がなくなつてきてしまつていゝわけではない。わずかだが、直系家族(形態)がふえてきていゝ。

変容をとげながらも、なお、小土地所有を基礎とした経営の主体として、家的な要素をはらみながら、今日の農村家族は、一般には、村落の単位となつていゝとみてよいのではないかと思ふ。

九大の内藤教授は、末子相続地域の実例にもつづいて、家の弱いところは、ムラも弱いといわれる。なにほどかでも、単位となる家がなければ(したがって、家的要素という表現をしたりしたのだが)、村落生活という場合の村落の存在があやぶまれるのではあるまいか。ただし、くり返していゝば、この場合、家を理念的な典型としての「家」でなければいけないと考えるわけではない。

(三)

さて、予備的考察の方がなくなつてしまつたが、これまでのべてきた方向性にもつづいて、村落生活というものに、現状にそくして、なにほどの具体性をもつた言及をしなければならぬ。

その際に、ポイントになるのは、やはり、視点の限定というか、操作というか、観点の問題であろう。現代の農村社会には、村研共同討議の三つの報告にみられたように、安中の生活破壊的な事例から矢部のような在来の村落生活の基調を保持しているところまで、研究者の何を重要とみるかの視点によつて、いろいろの事例を引き出してくることができ

る多様性がある。そして、この点に関しては、私は、いわゆる高度経済成長のはげしい波をうけたあとの今日でも、形やあり方を変えながら、なお保持されているとみられるムラを枠づける相互依存的な共同態を重視しておくという観点に立つことにしたい。複合する扇面が狭くなってきており、質的な変化の問題があるとしても、この相互依存的な共同態（ゲマインシャフト）が、生産の場面と、消費生活的な場面とを、なにほどか重ねながら、今日の村落生活を現出させているのだと思う。したがって、この相互依存的な共同態を明らかにすることが、村落生活の根幹を明らかにすることになると思うし、いわゆる、現状で多様な形でみられる生産組織のあり方をも規制している論理の根本を理解することにも通じるものを含んでいると思う。

また、こうした問題を考える場合、ムラの原義をふりかえることも必要かも知れない。民俗学の竹田且氏によれば、ムラは家が群れたところを指した言葉で、その場合、単に家が一定地域に集まっているのではなく、家の連合体としての地域的まとまりをいうのだといわれる。そして、家が連合体を形成するのは、土地や労働や婚姻や祭祀を、共同にする必要からだったといわれる。それらの共同の契機にかかわるものが、形態やあり様はいろいろ変化してきているが、なくなってしまうているわけではない。たとえば、耕地は私的に所有されていても、その土地をも含めて、ここまでは自分のムラの土地領域だというような感覚は、こんにちでも、多くの農民にみられるものである。あるいは、現在ではムラうちの婚姻は非常に少なくなってきたが、それでもなお、世代を重ねてムラうちに住んでいることを通しての親類関係は非常に多いし、それ

が有形無形の相互依存の基礎となっている場合も多い。少なくとも、それぞれ共同の契機が、いま少し、精密にしらべられる必要があるのではあるまいか。

そして、当面まだ非常に未成熟なものであるが、こんにちのムラとムラの生活（村落生活）をみていく場合の重要な場面としてムラの自治的な組織の場面をあげておきたいと思う。自治的な諸組織や諸活動は、いわば共同の統制的側面であるから、村落生活が生産活動の場面と消費的な生活場面との何らかの複合の上に成立するとすれば、その複合のあり方や性質をもっともよく反映すると考えられるからである。一般的にいえば、確かに、いちじるしく兼業化がすすんだ農業集落であっても、そこにある自治的な組織は、おそらく、生産と消費の分離がすすんだ都市的な生活のなかにある町内会のようなものとは異なっている。有賀先生が、かつて、村落生活を全体的に理解するためには、いわゆる「生活組織」をみなければならぬといわれたことになぞらえていえば、こんにちの村落生活をより十分に理解するためには自治的組織をみなければならぬという云い方ができるのではないかと思うのです。そして、この場合の自治的組織というものが、単にせまい意味での行政上の組織あるいは行政末端機構となっているものだけを指すのではなく、しかしまた、行政と無関係なものだけを指すのでもなく、広い意味での共同の統制的諸機構にかかわるものであることをつけくわえておきたい。

以上でおわりますが、文字どおり、村落生活を捉えていく場合の一つの方向について試論的な私見をのべたにすぎませんでした。